

第V章 考 察

第1節 麻生田大橋遺跡出土の条痕文系土器

1. 研究史

近年、縄文時代終末期から弥生時代にかけての、とくに稻作の開始の時期をめぐる研究が活発化し⁽¹⁾、各地でシンポジウムや研究会等が開催されている⁽²⁾。西日本の突帯文系土器を縄文時代の土器とするか弥生時代の土器ととらえるかで議論が別れるところである。

東海地方西部においては、縄文時代晩期後半期から弥生時代中期前葉にかけて、西日本の突帯文系土器の影響を強く受けつつも独自の条痕文系土器文化を展開した地域として古くから注目されている。現在、この時期における東海地方西部の土器編年は、「稻荷山式」→「西之山式」→「五貫森式」→「馬見塚式」→「櫻王式」→「水神平Ⅰ式」→「水神平Ⅱ式」→「水神平Ⅲ式（岩滑式）」として体系づけられている。しかし、この時期を主体とする集落跡、水田跡等の発掘調査例は皆無で、特に東三河地方においては貝塚・土器棺墓資料などの層位学的に不明確な資料に頼り、それらを型式学的操作により体系化したものの多い。また「条痕文系土器」という言葉そのものの定義すら確定していないのが現状である。まだ、この時期の土器編年が明確に位置付けられたものではないことを如実に物語っている。

ここでは、東海地方西部における縄文時代晩期後半期から弥生時代中期中葉にかけての時期の先学の研究を大きく二期に分けることにする。1期は現在の編年が体系化された1972年までの時期、2期はそれ以後、現在に至る時期である。

〈第1期〉

東海地方西部地域における縄文時代晩期の研究に最初の一石を投じたのは山内清男氏である。山内氏は、1951年に発掘調査された吉胡貝塚第2トレンチから出土した土器の層位学的、型式学的な所見をもとに、縄文時代晩期の土器を、晩期旧A—晩期旧B—晩期中—晩期新と4つの型式に区分し、それぞれの型式が大洞B—大洞B C—大洞C—大洞Aに対比されるものとしている。また、晩期新以後の土器を「縄文直後」の土器として、それが弥生時代にあたるものであることを示唆している⁽³⁾。大参義一氏は大地遺跡の調査結果をもとに、山内氏の提唱した「晩期新」と「縄文直後の土器」との間にもう一つの土器型式の存在を想定し、それを「八剣式」と仮称した⁽⁴⁾。また、紅村弘氏は貝殻山貝塚・西志賀貝塚の調査結果から、「晩期新」に相当するものを「縄文式終末期Ⅰ」式、「晩期新」と「縄文直後の土器」をつなぐものを「縄文式終末期Ⅱ」式土器と仮称した⁽⁵⁾。紅村氏は更に、宝飯郡小坂

井町に所在する樺王貝塚の調査結果をふまえ、縄文式終末期Ⅱ式土器を「樺王式」土器と命名し型式設定をするに至った⁽⁶⁾。

「縄文直後」の土器は、久永春男氏により「水神平式」土器として型式設定されたが⁽⁷⁾、以後の水神平式土器の研究は紅村氏による一連の研究に代表される。紅村氏は水神平式土器を、第1類：条痕文を持つもの、第2類：遠賀川式土器、第3類：朝日式土器、第4類：変形工字文・流水文・列点文等が施された精製の波状口縁を持つ壺、第5類：磨消縄文等が施された精製の壺の5類に分類した。そして、貝殻山貝塚、西志賀貝塚の調査での所見をもとに、第2類の遠賀川式土器を「貝殻山式」土器と「西志賀式」土器に2分し、前者に伴う条痕文系の土器を「縄文式終末期Ⅱ式」、後者を更に2つに分けた後半期が「水神平式」土器の古い部分に相当することを主張した。また、「朝日式」には水神平式土器が伴うことから、「水神平式」土器は「西志賀式」と「朝日式」に併行する土器型式で、前後に2分される可能性が強いことを示唆している⁽⁸⁾。更に、「朝日式」に伴う水神平式土器が、肩部に波文を持つ甕が現れる典型的な水神平式土器と異なる様相を示すことから、「朝日式」に併行する水神平式土器を「水神平亜式」土器と仮称するに至った⁽⁹⁾。1960年には樺王貝塚の発掘調査が実施された。その調査の結果、西志賀式土器を伴った水神平式土器が朝日式土器を伴わずに出土したため、それらを典型的な水神平式土器に先行するものとして「水神平1」式とし、典型的な水神平式土器を「水神平2」式、朝日式の新しい部分に伴う今まで水神平亜式と仮称してきたものを「水神平3」式と規定し、1式～3式に漸時推移していくことを主張した⁽¹⁰⁾。それ以後、水神式1. 2. 3. 式を水神平I・II・III式と改称し、それぞれの型式内容を明確化するに至った。大型壺においては、I式：口縁内面が無文のもの、II式：肩部等に波文が施されるもの、III式：受口状口縁を持ち、波文が撥上げ文をなすもの等と規定している⁽¹²⁾。

立松宏氏は、水神平Ⅲ式の単純層を持つものとして半田市の岩滑遺跡出土資料を紹介し、「岩滑式」を提唱した⁽¹³⁾。これにより水神平式土器は「水神平I式」～「水神平II式」～「岩滑式」と呼称され現在に至っている。

さて、東三河地方では平井稻荷山貝塚・五貫森貝塚・大蚊里貝塚の発掘調査が明治大学を中心に実施され、その調査結果から、杉原原荘介氏・外山和夫氏は、山内氏の晩期中を「稻荷山」式、晩期新を「五貫森」式と型式設定した。そして、これまでの研究成果もふまえ、縄文時代晩期後半期以後の土器を「稻荷山式」→(大蚊里式)→「五貫森式」→「樺王式」→「水神平式」として大系づけた。また、「稻荷山式」が大洞C式に、「五貫森式」と「樺王式」が大洞A式に、「水神平式」が大洞A'式と併行関係にあるとした⁽¹⁴⁾。

一方尾張地方では、増子康真氏が馬見塚遺跡出土土器の研究を通して、「五貫森式」と「樺王式」をつなぐ型式として「馬見塚式」を設定した⁽¹⁵⁾。更に、「稻荷山式」と「五貫森式」をつなぐ型式として「西之山式」土器を設定し、東海地方西部の土器編年は、「稻荷山式」→「西之山式」→「五貫森式」→「馬見塚式」→「樺王式」→「水神平I式」→「水神平II式」→「岩滑式」として大系化されるに至った⁽¹⁶⁾。しかし、「馬見塚式」については資料的に問題点も多く、大參義一氏は、一宮市の馬見塚遺跡、下り松遺跡、佐野遺跡、大口町の西浦遺跡、名古屋市の古沢町遺跡等の調査結果をもとに、馬見塚F地点出土土器を「五貫森式」に対比し、増子氏の提唱する「馬見塚式」を馬見塚B地点

出土土器と下り松遺跡出土土器をもとに前後に2分した。また西浦遺跡・古沢町遺跡出土土器はいずれも「樺王式」土器に相当するとしている。そして、五貫森式土器に伴うのが大洞C₂式の新しい部分に相当し、馬見塚式の後半が信州の氷I式土器に併行するものとして、山内氏以来の五貫森=大洞A式併行という関係を否定している¹⁷⁾。

〈第2期〉

前述の如く、第1期の研究は資料的な制約も多くあり、文様、器面調整技法の検討に重きを置かざるを得なかった。よって、個々の器種における時間的な変容はとらえ得ても、器種の組み合わせとの変容、具体的事実に即した変容の検討といった点で弱点を持っていた。それ故に、小地域単位ごとの変容の差異についても具体的な調査事例から説明されたものは少なかった。

こうした現状に対して、新たな視点からの検討を進めたのが石川日出志氏である。石川氏は従来の「稻荷山式」～「岩滑式」への編年を概ね認めつつも、土器組成の変化と器種の消長を中心に分析を展開し、「樺王式」の時期に一つの文化的画期があることを論証した。そして、「稻荷山式」=大洞C₁=滋賀里Ⅲ式→「西之山式」=大洞C₂（古）→「五貫森式」=大洞C₂（新）→「馬見塚式」・「樺王式」=大洞A=畿内第I様式（古）→「水神平式」=大洞A'=畿内第I様式（新）→「岩滑式」=山王Ⅲ=畿内第II様式の編年対比を行った¹⁸⁾。また、石川氏は中部高地の浮線文土器のあり方を3群に分類し、第2群土器と「馬見塚式」、第3群土器と「樺王式」土器が併行関係にあることを論証した¹⁹⁾。

次にあげられるのは設楽博己氏の研究である。設楽氏は「小地域単位の編年を進めつつ、地域編年相互の横の関係を把握する。」という方法論に立ち分析を進めた。そして「馬見塚式」土器が「樺王式」土器と分布域を異にしており、中部高地では馬見塚式のメルクマールとされる突帯がみられないという分布の偏差から「馬見塚式」の存在を否定している。そして、水神平I式、II式も分類することの具体的事例に乏しいため「水神平式」として一括している²⁰⁾。設楽氏はまた、浮線文土器をA、B2つの型に分類し、A→A+B→Bという3つの時期を設定した。編年は困難であるが、浮線文土器の古い部分が大洞A式に併行することを述べている²¹⁾。

佐藤由紀男氏も殿畠遺跡の出土遺物を考察する中で東海地方東部地域の研究を進め、設楽氏と同様に増子氏の「馬見塚式」と水神平式二分論を否定している²²⁾。また、中村五郎氏は「馬見塚式」を認めつつ、2期に区分するが、大参氏とはその型式が逆になっている²³⁾。

こうした混乱の中で、増子氏は「馬見塚式」を一型式とする従来の立場に立ち、今までの分析に加えて土器組成・器種の消長の問題、他地域との編年対比の研究を深め、「五貫森式」=大洞A=長原式→「樺王式」=大洞A'=畿内第I様式→「水神平II式」=（御代田）=畿内第I様式→「岩滑式」=畿内第II様式の編年対比を発表し、混乱はますます激しくなった²⁴⁾。

こうした第2期における再検討の結果は未だに混乱したままだが、徐々に資料が蓄積されつつあり、新しい研究も出るようになってきた。山田猛氏は、伊勢湾沿岸を頭に置き縄文晩期の土器をI～VI期に区分し、更に「五貫森式」に相当するⅢ期を2期に、「馬見塚式」にあたるⅣ期を3期に細分している。また、「樺王式」以後を条痕文系の土器群と規定し、明確に弥生時代の土器として扱っている²⁵⁾。

従来、研究の立ち遅れていた伊勢地方においても研究が盛んになり、鈴木克彦氏は突帯文系の土器を4期に分類し、Ⅱ期=五貫森式=船橋式→Ⅲ期=馬見塚式=長原式→Ⅳ期=樺王式=弥生時代前期中段階という編年対比を発表した²⁶。このように伊勢湾沿岸地方を含む大きな視野での研究が芽生えてきたのが現在である。

[註]

- (1)・山崎純男「弥生文化成立期における土器の編年的研究」『鏡山猛先生古稀記念論叢』 1980
 - ・家根祥多 「近畿地方の土器」『縄文文化の研究』4・縄文土器II 1981
 - ・佐原真 「弥生土器I 総論」『弥生文化の研究』3・弥生土器I 1986
 - ・浅岡俊夫 「伊丹市口酒井遺跡の凸帯文土器」『歴史と考古学』高井悌三郎先生喜寿記念論集 1988
 - ・泉拓良 「中国・四国地方以東の凸帯文系土器様式」『縄文土器大観』第4巻・後期・晚期・続縄文 1989
- (2)・シンポジウム 「縄文から弥生へ」・帝塚山考古学研究所編 1984
 - ・シンポジウム 「〈条痕文系土器〉文化をめぐる諸問題」愛知考古学談話会 1985
 - ・シンポジウム 「縄文晚期から弥生時代への移行期の諸問題」日本考古学協会 1986
 - ・シンポジウム 「縄文文化・東からの流れ」橿原考古学研究所付属博物館 1990
 - ・研究会 「突帯文土器の終末」愛知考古学談話会 1990 他
- (3) 山内清男他『吉胡貝塚』埋蔵文化財発掘調査報告第一 文化庁 1952
- (4) 大參義一「愛知県大地遺跡」『古代学研究』11 1955
- (5) 紅村弘「愛知県における前期弥生式土器と終末期縄文式土器との関係」『古代学研究』15 1956
- (6) 紅村弘他『篠東一篠東第二次・樺王・行明調査報告』愛知県小坂井町教育委員会 1961
- (7) 久永春男「東海」『日本考古学講座』4 1955
- (8) (5)と同じ
- (9) 紅村弘、吉田富夫『西志賀貝塚』名古屋市文化財叢書19 1958
- (10) (6)と同じ
- (11) 紅村弘「水神平式土器とその周辺」『信濃』19-4 1967
- (12) 立松宏「岩滑遺跡」『半田市誌』資料編1 1968
- (13) 杉原莊介・外山和夫「豊川流域における縄文時代晚期の遺跡」『考古学集刊』第2巻下東京考古学会 1964
- (14) 増子康真「愛知県馬見塚遺跡の縄文土器について」『考古学手帖』19 1963
- (15) 増子康真「尾張平野における縄文晚期後半期土器の編年的研究」『古代学研究』40 1965
- (16) 大參義一「縄文式土器から弥生式土器へ」『名古屋大学文学部研究論集』56 1972
- (17) 石川日出志「三河・尾張における弥生文化の成立―水神平式土器の成立過程について」『駿台史学』第52号 1982
- (18) 石川日出志「中部地方以西の縄文時代晚期浮線文土器」『信濃』第37巻第4号 1985
- (19) 設楽博己「中部地方における弥生土器の成立過程」『信濃』第34巻第4号 1982
- (20) (19)と同じ
- (21) 佐藤由紀男「静岡県三ヶ日町殿畠遺跡出土の土器について（上・下）」『古代文化』36、37 1984
- (22) 中村五郎「畿内第1様式に併行する東日本の土器」 1982
- (23) 増子康真「愛知県を中心とする縄文晚期後半期土器型式と関連する土器型式の研究」 1985
増子康真「馬見塚式土器の地域性」『古代人』第47号 1986
- (24) 山田猛「縄文晚期の土器の特徴と変化」『刈谷市史』第1巻 原始・古代・中世 1989
- (25) 鈴木克彦「伊勢湾沿岸地方における凸帯文深鉢の様相―伊勢地方からの視点」『三重県史研究』6 1990

2. 土器の分類

麻生田大橋遺跡から出土した縄文時代晚期後葉から弥生時代前期にかけての時期の土器には、

深鉢形土器・甕形土器・壺形土器・鉢形土器・浅鉢形土器・注口土器

の6種類の器種がある。

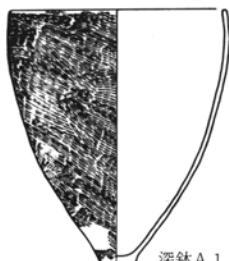
深鉢形土器と甕形土器を合わせて、甕形土器（もしくは深鉢形土器）と総称して呼ぶ考え方もあるが、ここでは、口頸部を意識せず胴部と区別のないものを深鉢形土器、少しでも口頸部を意識している（口頸部ナデ消し、頸胴部界の稜等）ものを甕形土器とする。また、口頸部径が広く口端近くで外反するものを甕、比較的口径が狭く肩部の明瞭なものを壺として大別するが、麻生田大橋遺跡出土資料では両者の区別が不明瞭なものも多く存在する。そこで、ここでは目安として、胴部最大径に対する口径の比が、0.7を越えるものを甕、0.7以下のものを壺として分類することにする（表14・15）。以下、土器棺資料を中心にして各器種ごとの器形の分類を行う。

① 深鉢形土器

器面調整法の違いにより、以下の3類に大別する。

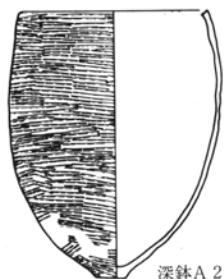
深鉢A：器面に条痕調整を施すもの。

口頸部の形態により2類に分類する。



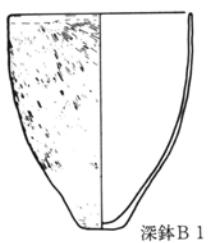
A 1・口縁部が直立もしくはごくゆるやかに内弯・外反するもの。

口端部は面取りするものとしないものがある。口縁部は直立、内弯するものが主で、外反するものは稀である。胴部はゆるやかに内弯するものが多く、直線的で膨らみの少ないもの（86、106）もある。器面に二枚貝腹縁もしくは植物茎束による斜方向条痕を施す。下胴部に擦痕調整を施すものもある（69、90）。



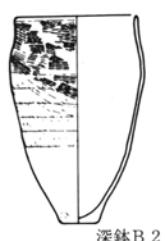
A 2・口縁部が内弯するもの。

器面には半截竹管（系）を原体とする单斜方向または横方向条痕を施す。口端はすべて面取り。とくに横方向条痕を施したもののは強く面取りされ、中央部が沈線状にくぼむ傾向にある。底部はDタイプが多く、口径に比し径が小さい。稀に二枚貝腹縁による单斜方向条痕を施すもの（8、33）がある。面取りはしない。



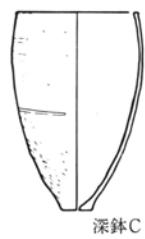
深鉢B：器面に擦痕調整を施すもの。

口頸部の形態により2類に細分する。



B1・口縁部が直立するもの。

中型が多い。器面は斜ないし縦方向の擦痕調整。口端は面取りしない。胴部は膨らみが少なく、直線的に開くものが多い。

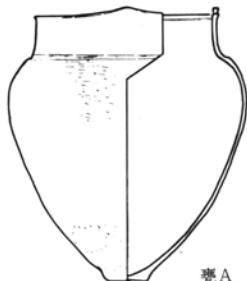


深鉢C：器面にミガキ調整を施す。赤褐色を呈する。

胴部は丸味を持って内弯するものと、直線的に開くものがある。口縁部は短く直立もしくは内弯する。口端は弱く面取り。

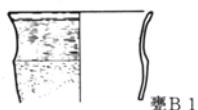
② 壺形土器

口頸部と胴部との境の形態の違いを主に、以下6類に大別する。



壺A：口頸部と胴部の境に段を有するもの。

口頸部は直立し広口の円筒状を呈す。肩部は張り、胴部は倒卵型。口頸部外面はミガキに近いいねいなナデ調整、胴部は斜方向の擦痕調整。口端は粘土が外にはみ出し突帶様のふくらみを持つ。

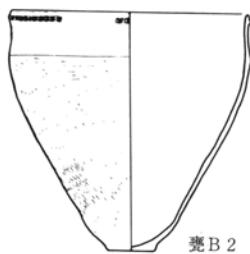


壺B：頸胴部界に明瞭な稜を持つもの。

調整技法の違いにより以下の2類に細分する。

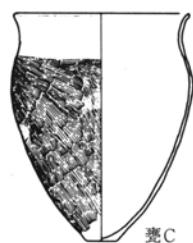
B1・条痕調整を施すもの。

胴部最大径は口径より大きい。口頸部は内弯し、口縁部で外反する。口端直下に素突帯がめぐる。口頸部は横方向条痕の上から弱いナデ消し、胴部は斜方向擦痕を施す。土器棺に使われたものは少ないが、検出の際には多く出土している。



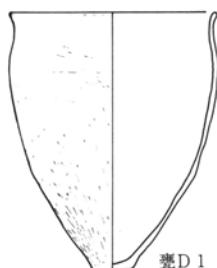
B 2・擦痕調整をほどこすもの。

口径と胴部最大径がほぼ等しい。口頸部はナデ調整で、口端に貝殻による押圧を加えた突帯がめぐるものもある。胴部は斜方向擦痕調整。大型と中型のものがある。



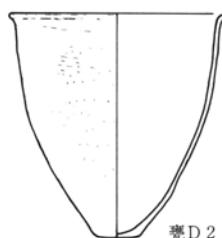
壺C：頸胴部界に稜を持つが、退化傾向を示し不明瞭になったもの。

口頸部は内弯してから外に開く。頸胴部界の下は弱く膨らみ、胴部はゆるやかに内弯し倒卵型を呈す。器面は斜方向擦痕もしくはミガキ調整。



D 1・口頸部はゆるやかに内弯してから外反するもの。

口径は胴部最大径に等しいかやや大き目である。胴部は長胴型。全面に斜方向の擦痕調整を施し、口頸部は横方向にナデ消しを加える。ナデ消しの幅は広いもの（10cm以内）と狭いもの（5cm以内）がある。



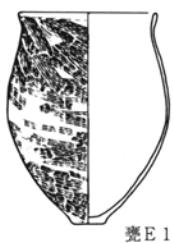
D 2・口頸部が直立し、口端近くで外に開くもの。

胴部は長胴型。全面に斜方向または縦方向のミガキ調整を施した後、口頸部のみ横方向にナデ消す。ナデ消しの幅は狭く5cm以内である。



D 3・口頸部が内弯するもの。

口径は胴部最大径に等しいかやや小さ目である。器面には斜方向擦痕もしくはミガキ調整を施した後、口頸部を横方向にナデ消す。ナデ消しの幅は狭く3cm内外。口端直下に突帯がめぐるものもある。



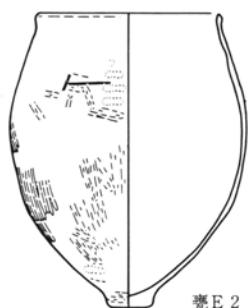
壺E：頸胴部界が不明瞭で、調整においても区分しないもの。

調整技法の違いから2類に細分する。

E 1・器面に二枚貝腹縁・植物茎束による条痕を施すもの。

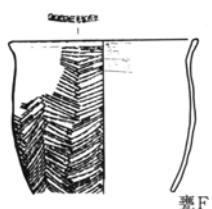
口頸部は短く外反する。胴部との境はくびれを呈す。

口端は肥厚し、低い突帶様のふくらみを持つ。胴部は丸味のある倒卵型。中型のみ。



E 2・器面にミガキまたは擦痕調整を施すもの。赤褐色を呈する。

口端部は肥厚し、低い突帶を持つものと口端に押圧を加えたものがある。胴部は球形に近い倒卵型。



壺F・頸胴部界が大きくくびれ、口頸部が外に開くもの。

口径が胴部最大径に等しいもの(F 1)と、胴部最大径より大きいもの(F 2)がある。器面は半截竹管(系)を原体とする縦羽状条痕を施す。口頸部内面に刷毛目調整を施すものもある。

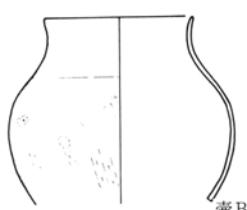
(3) 壺形土器

擦痕・ミガキ調整系のものと、条痕調整系のものがある。前者を4類(A-D類)、後者を肩部形態の違いを主に8類(E-L類)に分類する。



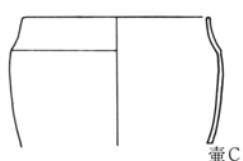
壺A：器面はミガキ調整。頸胴部界に段を有するもの。

口頸部は内傾し、内面に1条の沈線を施す。肩部は張り、最大径は胴上部に位置する。小型。



壺B：器面はミガキ調整。頸胴部界に明瞭な稜を持つもの。

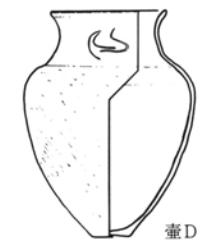
口頸部は内傾し、口端付近で短く外に開く。肩の張りはA類より弱く、胴部は丸味を帯びる。最大径は胴部中央やや上に位置する。



壺C：器面はミガキ調整。頸胴部界に稜を持つが退化傾向を示し不明瞭になる。

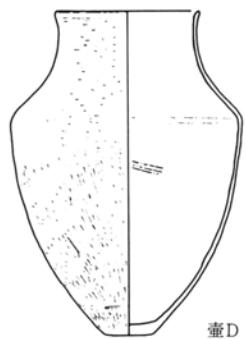
口頸部は角度を変えず内傾する。肩はA・B類に比

べ張りがなくナデ肩である。ミガキも雑になる。



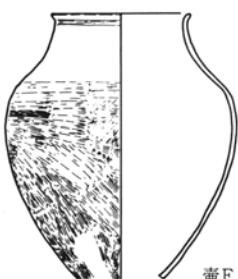
壺D：赤褐色を呈する低突帶ミガキ系の土器である。大型と中型のものがある。

中型・口頸部は内弯し、口縁部で外反する。口端直下に素突帶を持つものがさる（77は口頸部が内傾し、突帶は肩部につく。）。胴部は肩の張る倒卵型である。頸胴部界は不明瞭ながらも稜をなす。最大径は胴上部に位置する。大型・口頸部は内弯してから口端近くで短く外反する。口端直下には低い突帶がめぐる。肩部との境はあいまいであるがミガキ調整の方向で区分する。肩の張るものとナデ肩のものがある。



壺E：肩部に明瞭な稜を持つもの。

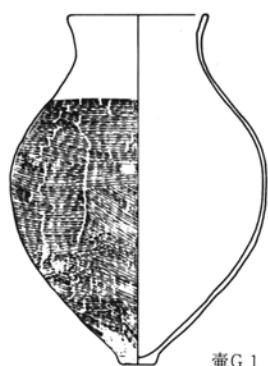
出土量は少ない。甕A類に対応。



壺F：肩部に稜を持つが、退化傾向を示し不明瞭になっているもの。甕C類に対応。

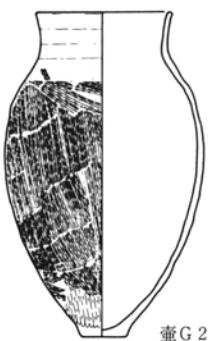
口頸部は内傾し、口端近くで短く外反する。口端直下に突帶を持つものもある。口頸部はミガキに近いていねいなナデ調整。胴部は倒卵型。肩部外面に横方向、胴部に斜方向の条痕を施す。

壺G：口頸部と胴部の境は不明瞭だが、調整技法で区分するもの。



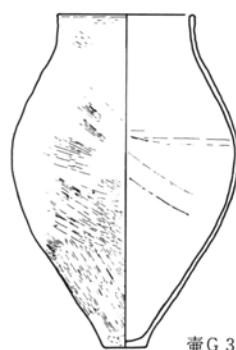
G 1・口頸部と肩部に別々の調整を施したもの。

口頸部は内弯してから外反し、長胴型の胴部を持つ。口頸部にミガキ、胴部に条痕調整を施す。頸部のくびれ部に突帶を持つもの（58）もある。



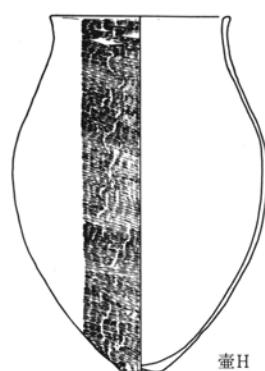
G 2・全面に擦痕または条痕を施した後、口頸部のみ横方向にナデ調整を加え、擦痕、条痕をナデ消し、胴部と区分したものである。

ナデ消しの幅は広いものと狭いものがある。胴部は膨らみの強い長胴型である。



G 3・全面に条痕を施した後、口頸部のみ弱くナデ消し、胴部と区分しているもの。ナデ消しが弱く、区分が不明瞭なものも多い。

細長い長胴型の胴部を持つものが主である。口端直下に突帯がめぐるものもある。



壺H：口頸部と胴部との境が不明瞭で、調整においても区分をしないもの。甕Eに対応。

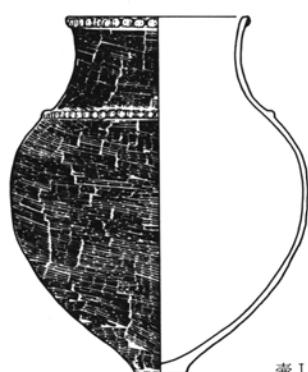
口頸が外反するもの、ゆるやかに内弯してから外に開くもの、円筒状に立ち上がる等バラエティに富む。肩部も強く張るものとナデ肩のものがある。胴部は長胴型を呈するが、球形に近く膨らむものも多い。器面は全面条痕調整である。調整の方向で下胴部、上胴部、口頸部を区分するものもある（95）。調整原体は二枚貝腹縁を主とし、稀に植物茎束のもの（31、62）もある。全面横方向条痕を施すもの（74）も出現する。



壺I

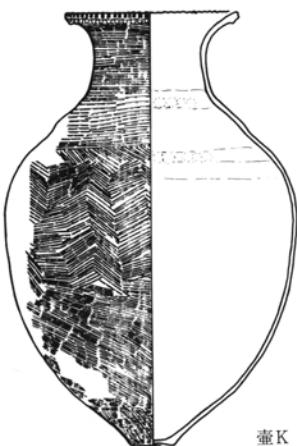
壺I：所謂、伊勢系の大形壺である。

広口の口頸部は内傾し、口端近くで外に開く。胴部は球形で、口端直下と肩部に太い突帯がめぐる。貝殻による押圧をえたものが多い。胎土は砂粒を多く含み、色調は白黄色を呈す。



壺J：2条の太い突帯を持つ大型壺である。

口頸部は内弯してから口端近くで外に開き、球形の胴部を持つ。口端直下と肩部に指頭押圧をえた太い突帯がめぐる。器面には半截竹管（系）を原体とする横方向条痕を施す。



K類：縦羽状条痕・波文等を施文した大型壺である。

口頸部はJ類に比べ細長く、外反の度合いが強い。

口端に半截竹管による押圧・押引を施し、直下に指頭または棒による圧痕を加えた突帯がめぐる。胴部は球形だが、J類に比べ膨らみが少ない。肩部突帯はない。器面に半截竹管(系)を原体とする横方向・縦羽状条痕、櫛による波文を施す。調整というより施文に近い。口端内面にも波文、縦沈線、連弧文、突帯等を施すものが多い。中型のものは口縁部の外反の度合いが少なく、口端直下に突帯を持たない。原体も細い半截竹管である。



壺L：所謂、遠賀川系の壺形土器である。

口頸部は外反し、胴部は横に長い楕円球。胴部中央もしくは胴下部に最大径を持つ。

④ 鉢形土器

体部の形態により、以下の4類に分類する。

鉢A：椀型の体部を持つものである。

ミガキ、擦痕調整を施すもの、

浮線文系C類、

外来系のもの（129、139）

が主なものである。

鉢B：体部は内弯し、口端近くで直立するもの。

浮線文系B類

がこれに相当する。

鉢C：胴部は“く”字状に弯曲し、口頸部は内傾してから口端

近くで短く直立するもの。

浮線文系A類

がこれに相当する。

鉢D：口頸部は内弯もしくは直立し、口端近くで外に開くもの。

浮線文系D類
がこれに相当する。

⑤ 浅鉢形土器

体部の形態の違いから、以下の4類に分類する。

浅鉢A：体部が“く”字型に屈曲するもの。
口頸部は内傾し、口端近くで直立もしくは外反する。鉢A類に対応。器面はミガキ調整。口縁部内面に沈線を施すものが多い。

浅鉢B：皿型を呈するもの。
器面はミガキ調整で、体部は内外面とも先の丸いヘラによる平行沈線が1～3条施される。

浅鉢C：体部が強く内弯するもの。
器面はミガキ調整。先の丸いヘラによる数条の平行沈線を体部内外面ともに施す。瘤状突起を持つものが多い。

浅鉢D：体部との境に稜を持ち、口頸部が外に開くもの。
西日本系の精製浅鉢である。

3. 時期区分

(1) 麻生田大橋遺跡出土資料の特質

麻生田大橋遺跡出土の土器を代表するのは、土器棺墓に棺として使用された土器である。これから、土器棺に使用された土器を中心に分析を進めていくが、当遺跡の土器棺は器面にこげ痕を持つもの等日常生活に使用されていた痕跡をのこすものが多い（特に、深鉢・甕に顕著）。多くの場合、日常生活で使われていた土器を、棺として転用したものであろう。従って土器棺に使用された土器はある程度日常生活を反映しているとみてまちがいない。土器棺使用土器の分析は、日常生活の復元につながると考えたい。

さて、麻生田大橋資料の持つ特質の第1点目は、器形の認定が容易だということである。東三河地方の縄文時代後・晩期の遺跡で発掘調査されたものは、吉胡貝塚・伊川津貝塚・平井稻荷山貝塚・櫻王貝塚・五貫森貝塚等の貝塚を中心とする遺跡が多いため、土器の分析は小片による口頸部の形態や文様、器面調整等に頼らざるを得ず、器形・器種の認定、器種の組み合わせなどの分析が系統的に行

われることがなかった。麻生田資料の場合、とくに壺・甕の器形に豊富なバリエーションがみられ、口頸部の破片のみでは深鉢か壺・甕かの区分がつかず、器形、器種の判断は不可能である。この点で土器棺資料は、土器1個体としてある程度のまとまりを持っているため器形の認定は容易である。豊富なバリエーションもここから導き出され、器種の認定にも一役買っている。

麻生田土器棺資料の特質の第2点目は、土器棺が蓋と棺身、合口棺等と2～3個体の土器が組み合わされて埋納されることが多いため、同時性の認定が容易であり、ある程度まで器種構成が復元できることである。

特質の第3点目は、土器棺の前後関係を層位的にとらえることができないことがある。土器棺が埋納されるのは“黒ボク”と称される黒（褐）色土内であるため、遺構の検出が困難であること、黒色土層そのものが現代の耕作や中・近世の遺構等により削平・掘削されているために層位的事実に基づいた分層・分析が不可能である。従って、縦の時間軸の設定は土器の型式学的操作に頼らざるを得ないのである。

第4点目は、元来、土器棺自体が単独で埋納されるものであるために、土器棺と土器棺、土器棺と同時期の土坑等の遺構との切り合い関係が極めて稀なことである。よって、土器棺の埋納時期の前後関係が不明確で、これも第3点目の特質と同様の操作に頼らざるを得ない。

第5点目は、土器棺資料が堅穴住居跡等の遺構資料に比較して“一括性”が少ないとある。麻生田大橋遺跡では現在のところ居住域にあたる地区が発見されておらず、堅穴住居跡を検出していない。住居跡資料と土器棺資料が比較できれば更に分析は深まるのであろうが、現状では土器棺資料のみに頼らざるを得ない。従って“一括性”ということでは、特質の第3、4点と同様に弱い面を持っている。

(2) 時間軸設定における基本的操作

土器棺を主体とする麻生田大橋遺跡出土資料を時期区分するにあたり、上記の5つの資料的特質および制約を考慮しつつ、下記の6つの資料操作を行い、時間軸ならびに画期を設定する。

資料操作1：横の時間軸（同時性）の設定

麻生田大橋遺跡出土の土器棺は、単体で埋納されることもあるが、蓋と棺身、合口棺など2～3個体の土器を組み合わせて用いる場合も意外と多い。この同時期に一括埋納された土器の組み合わせを横の時間軸—同時性としてとらえる。

資料操作2：縦の時間軸（時期の推移）の設定1

土器棺墓は基本的に単独で埋納されるので、土器棺どうしで切り合い関係を有するのは稀なことである。例えば、S Z18、- S Z19-S Z20、S Z59-S Z62-S Z63、S Z83-S Z84-S Z92のように切り合い関係を有する可能性を持つものがある。またS Z47-S K334（1期の袋状土坑）のように、同じ時期に属する遺構と切り合うものもある。これらの先後関係を決定することにより縦の時間軸を設定する。しかし、前述したように、切り合い関係は余りにも少なく、時間軸とするには資料的限界があるので、以下の2操作を加味することでこれを補強する。

資料操作3：縦の時間軸の設定2

1、2の操作で得られた大凡の時間軸をもとに、器種ごとの突帯の有無、突帯に施す刻目の原体の違い、口頸部—肩部—胴部の形態などの変容を型式学的操作により時間の推移としてとらえ、これを縦の軸とする。特に、東海地方西部地域の遺跡の推移の例を考慮し頸胴部界における変容（有段→稜→不明瞭化）に主眼を置いて時間的推移を組み立てる。

資料操作4：横の時間軸の補強

3つの操作で得られた時間の推移をもとに、器形の同時性を抽出・認定することで、横と横の同時関係をとり出し、横の時間軸を補強する。

資料操作5：画期の設定

1～4の操作で得られた縦、横の時間軸について、器種ごとの器面調整技法、調整原体の違い、胎土、焼成の違い、製作技法の変容などから画期を把握する。

資料操作6：他地域との比較

同時期と思われる他の遺跡の一括資料と比較することで、各画期の持つ特質を抽出し、それを他地域の遺跡と比較することで、その特質が時期差なのか地域差なのか判断する。

(3) 時期区分

上記の6つの操作を通して得られた時間軸をもとに、麻生田大橋遺跡出土の土器をⅠ期～Ⅳ期の4期に画期する。

麻生田Ⅰ期

S Z 04・08・09・28・78・86・96がこの時期に相当する。土器棺は少ないが、検出の際にはかなりの量のこの時期の土器が出土している。

〈組成〉

深鉢B 2 (5)・C (39)、甕A (113)・B 1 (12)・B 2 (117、146)、壺B (10)・E (7)。また検出の際に、壺A (415、416)、甕B 1 (257、258、264他)・B 2 (253～255他)等が出土している。組成の主体は突帯文系の甕であり、それに擦痕・ミガキ系の深鉢、ていねいなミガキ調整を施した西日本系の壺・浅鉢が少量含まれる。

〈特徴〉

- ① 甕類ではしっかりした突帯が口端直下にめぐる。突帯には二枚貝による刻目を施したものと素突帯のものがある。
- ② 甕類の肩部は段もしくは明瞭な稜を持ち、胴部と区分されている。
- ③ 器面調整は、ケズリ調整の後にミガキ調整を施すものが多い。内面調整は甕、壺、深鉢、浅鉢ともに概してていねいで、砂粒をしっかり沈めた後にミガキもしくはナデ調整を施している。

〈時期〉

ほぼ五貫森式期に相当する。五貫森式期は概ね西日本系の突帯文系土器群に属するが、畿内地方に比べると、2条突帯を持つ甕はほとんどなく、大部分が1条突帯（口端直下につけられ肩部にはない。）の甕であること、突帯の刻みはヘラによるものが少なく大部分が二枚貝腹縁によるものである点で違

いを持っている。東海地方における突帯文土器の持つ地域差としてとらえて良いだろう。

五貫森式期を代表する遺跡としては、三河地方では五貫森貝塚、尾張では馬見塚遺跡（F地点出土土器）をあげることができる。麻生田Ⅰ式は当然三河地方の五貫森貝塚の組成に近いが、尾張を代表する馬見塚遺跡F地点出土土器とは組成の点で多少の違いがみられる。違いの第1点は、馬見塚遺跡F地点出土土器にみられる深鉢A1類がみられないことである。これは五貫森貝塚、麻生田大橋遺跡に共通している⁽¹⁾。尖底の底部は検出の際に出土しているが（387～389他）、調整はすべて擦痕調整で条痕調整ではない。三河地方の五貫森式期の深鉢は擦痕もしくはミガキ調整が主体を占めると言つてよいであろう。もう1つ違う点は、西日本の黒色磨研系の壺A、浅鉢A1の出土が少ないとある。麻生田大橋遺跡からも壺A（415、416）、浅鉢A（428、431、433）が出土しているが量は少ない。石川氏はこの2つの事実から、馬見塚遺跡F地点出土土器は五貫森貝塚出土土器に先行するとして、両者の間に時間差のある可能性を示唆しているが⁽²⁾、増子氏と設楽氏はこれを地域差として把握している⁽³⁾⁽⁴⁾。この問題は愛知県下における突帯文土器の展開に重要な意味を持つてくるが、突帯文土器群そのものが西日本系である点を考慮すれば地域差としてとらえることが可能だと思われる。しかし、断定はできない。三河地方での五貫森式期の資料の増加を待ちたい。

麻生田Ⅱ期

突帯文系土器群が終末を迎える、大形壺を主体とする条痕文系土器群が成立・展開する時期である。

a・b・c 3つの小期に区分できる。

Ⅱa期

S Z07、13、14、48、62、68、70、73、77、79がこれに相当する。Ⅰ期に比して土器棺墓の数はかなり増加する。Ⅰ期としてあげたS Z96（146）の土器はⅠ期とⅡa期の中間的な形態を持つと思われる。

〈組成〉

深鉢A1（3）・B1（9、14、110）甕C（17）・D2（16、102）・D3（66）、壺C（99）
D1（89、102、108、109）・D2（107）・F（109）がある。

〈特徴〉

- ① 甕類は肩部が退化傾向を示し、段は消失しあいまいな稜がのこる。突帯も退化し低くはっきりしないものとなる。この低い突帯を持つ赤褐色を呈するミガキ系の壺・甕が盛行するのもこの時期の特徴である。突帯を持たない117の系譜をひくもので、この時期に相当するものは今のところみつかっていない。
- ② 深鉢はⅠ期に統いて擦痕系のB類が主体をなすが、条痕系のA1類が出現する。しかし、数は少なく条痕は粗で素面がのこる。条痕の方向も雑である。中型品だけである。
- ③ 壺類が多様化し、大型の壺も出現するが概して中型のものが多い。Ⅰ期以来のミガキ系のC類、低突帯を口頸部もしくは肩部に持ち器壁が赤褐色を呈するミガキ系の中型壺D類、甕E類から転化したと思われるF類等がある。F類には大型化が進行している。

以上みてきたようにⅡa期は突帯文系の退化現象と条痕文系土器の出現という点で、Ⅱ～Ⅲ期の間ほど明確ではないが、Ⅰ期との間に一線を画することができる。

Ⅱb期

S Z11、15、19、24、27、32、33、34、35、40、41、42、44、45、50、52、53、54、55、56、61、66、72、74、82、84、85、87、89、90、91、92、98がこれに相当する。土器棺墓が爆発的に増加する時期である。

〈組成〉

基本的にはⅡa期の影響のもとに発展したものである。

深鉢A 1 (20、42、50、59、64、69、73、76、78、90、94)・B 1 (72)・B 2 (85)、甕C (132)・D 1 (60、81、112、127)・D 2 (93、143)・D 3 (68、92、133)・E 1 (23、145)・E 2 (41、130)、壺D 2 (15)・G 1 (53、114、147)・G 2 (65、105、115、123、125、131、136、137)・G 3 (34、48、61、62、124、138)・H (95)がある。

〈特徴〉

① 深鉢においてはⅡa期に出現したA 1類が激増し主体を占めるようになる。B 1・B 2類は少数のこるのみである。A 1類はⅡb期前半には断面形が逆三角形に近い口頸部が大きく開くもののみである。条痕は器面に隙き間なく施される。方向は雑で所々で交差したりする(42、69)。また底部のみ擦痕調整のものも多い。Ⅱb期後半には広口型(50、73、78、90、94)に加えて断面五角形に近い細身のタイプ(20、59、64、76)が出現する。面取りが盛行し、条痕も整然とした单斜方向のものとなる。条痕の原体は二枚貝腹縁によるものが大部分で一部植物の茎束様のものを含んでいる。B類は擦痕と条痕の区別がつかないあいまいな調整である。

② 甕ではⅠ期以来のミガキ系の系譜を持つものが赤褐色低突帯ミガキ系(41)をのぞき姿を消し、擦痕系が主体となる。甕B 2の系譜をひく突帯系の擦痕甕(81、112、127)、同じく甕B 2の系譜をひく無突帯の擦痕甕(60、93)、また117の系譜をひく擦痕中型甕(133)等とバラエティに富む。しかし、突帯は痕跡程度のものに退化している。そして96→81のラインから長胴型の擦痕系の大型壺(65)が出現している。

甕類の形態の特徴は肩部が退化し胴部との区分が不明瞭になることである。胴部との区分を明瞭化する意味で調整技法においては口頸部のナデ消しが盛行する。器面全体に擦痕調整を施した後に、口頸部のみ横にていねいにナデ調整を施し擦痕を消して胴部以下と区分するのである。また後半期には117→133の系譜を引くと思われる全面条痕を施した甕E 1(23)が出現する。条痕の密度は粗で方向も雑である(条痕系甕の出現)。甕E 1は23→145を通してⅣ期の甕Fにつながると思われる。

③ 壺型土器は多様化し個々の形態はバラエティに富む。条痕文系の大型壺が盛行する。肩部は甕類と同様退化傾向が著しく胴部との境が不明瞭となる。前半は口頸部にミガキ調整、胴部に条痕調整と調整による区分を行う(114)が、後半は甕類と同様に口頸部ナデ消し技法により口頸部と胴部を区分している。条痕の原体は二枚貝腹縁によるものが主体をなし、一部植物茎束様のものが含まれる。

109(II a期・壺F)→114(II b期・壺G 1)と系譜づけられる条痕文系の壺は、これ以後長胴化の著しい壺(115)、口頸部が大きく外反する球胴に近い長胴系の壺(137)、口頸部が直立する球胴系の壺(131)などのG 2・G 3類と肩部が張る全面条痕を施した壺(95)のH類の4つに分化する。

II b期の壺形土器は大型化が進み、条痕系・擦痕系のものともに長胴化傾向が顕著である。比率では条痕系のものが多いが、擦痕系のものもかなりの率でのこっている。

II C期

S Z01、03、06、10、21、46、47、49、57、59、64、65、71、101、102がこれに相当する。II b期とともに土器棺墓の数は多い。

〈組成〉

深鉢A 1(1、3、29、80、98、106、142)・A 2(8、21、33、83)・B 1(75)・C(82)、甕E 2(103)、壺H(31、67、70、71、74)・J(101、102)がある。ミガキ、擦痕系の器種が消失し、条痕系の大型壺が定型化して行く時期である。

〈特徴〉

- ① 深鉢A 1はすべて細身の断面五角形に近いタイプのもので口端はしっかり面取りされている。新たに口縁部が内弯するA 2類が出現する。8、33は口端部に面取りがされずやや古い時期の様相を持つ。器面は二枚貝腹縁による单斜方向条痕を施したもののが主体であるが、21は半截竹管系原体による单斜方向条痕である。B類・C類も少量ではあるがこの時期までのこるが、次のIII期になるとすべて姿を消してしまう。
- ② 甕類は数が激減する。突帯のとれたミガキ系(103)が一例残るのみでII b期で盛行した擦痕系の甕はすべて姿を消す。
- ③ 壺類はII b期に引き続いて形態がバラエティに富む。条痕文系の大型壺が主体となり、擦痕系の壺(52)も後半には条痕文系に吸収される。115→138と続く長胴化のタイプは124→71と引き続き存在するが、全面条痕が施され肩部が不明瞭化する。そして胴部が太さを増し、球胴化傾向を持つようになる。広口壺(137)タイプは31に受け継がれ全面单斜方向条痕を施したものとなる。球胴化タイプのもの(131)は62に受け継がれ全面单斜方向条痕調整のものとなる。この3タイプの壺は後半で、横方向条痕を全面に施した74に集約され、III期の定型化した2条突帯の大型壺形土器に引き継がれる。条痕の原体は二枚貝が主体を占めるが、一部半截竹管系のもの(101、102、壺J)が出現する。
- ④ II b後半期からII c期にかけて突帯を持つ伊勢系の土器の影響がみられる(92)。袋状土坑の出土例からもこの時期に突帯の復活をもたらす伊勢系の影響を受けたことは間違いない。おそらくこの影響のもとにIII期の2条突帯を持つ大型壺が出現したのであろう。

〈II期の時期〉

今までの編年にてはめてみると、II a期が五貫森式の新しい部分～馬見塚式の古い部分、II b期

が所謂馬見塚式、Ⅱc期が馬見塚式の新しい部分から樺王式の古い部分にかけてのものとなるであろう。増子氏による、五貫森→馬見塚→樺王式への流れ⁽⁵⁾、馬見塚式を否定する設楽氏の流れ⁽⁶⁾、馬見塚式を二期に区分する大参氏⁽⁷⁾、中村五郎氏⁽⁸⁾の流れ等、どれを当てはめてみても画期は明確に区分できない。麻生田大橋遺跡の場合、Ⅰ期とⅡa期の間、Ⅱc期とⅢ期の間に大きな画期を求めざるを得ない。石川氏が漸移的な変化ながらも樺王式に一つの画期を求めている⁽⁹⁾のもこれに当てはめると納得がいく。

尾張地方の馬見塚式土器と麻生田Ⅱ期（とくにⅡb期）の土器を比較して最も目につくのは、麻生田Ⅱ期の土器に突帯の退化現象とミガキ系・擦痕系の甕・壺が多い点である。特に、低突帯ミガキ系と称している赤褐色を呈するミガキ調整を施した壺・甕類、それから派生したと思われる擦痕系の壺・甕類の存在は麻生田Ⅱ期の大きな特徴の1つである。増子氏の馬見塚式土器の分類によると⁽¹⁰⁾、Ⅱ類bに相当するものである。馬見塚遺跡の場合は器面が粗面をなす場合が多いようだが、麻生田Ⅱ期のものは口頸部をナデ消している場合が多い。これは条痕文系の壺類にも共通する点で麻生田Ⅱ期の特徴的な手法である。これらの特徴は尾張で言われる馬見塚式に比べてやや新しい時期に比定できるのかも知れないが、土器棺の組み合わせでみると（第72図）、ミガキ・擦痕系の甕D・E類・壺D・G類は条痕文系の深鉢A1類・壺G類とセットになる場合が多くみられると同時に、甕C類・壺F類とⅡ期のうちでも古い時期（Ⅱa期）に属するものとセットになる場合もある。従って、ミガキ・擦痕系の壺・甕の多様さ、口頸部ナデ消しの手法は麻生田大橋遺跡のもつ馬見塚期の1つの地域的特色と考えてよいと思われる。東三河地方でも、郷中遺跡・五貫森貝塚・大蚊里貝塚・樺王貝塚等の資料として少量ではあるが出土している⁽¹¹⁾。条痕文系土器における類似性を考慮すると、この擦痕・ミガキ系の壺・甕の多様性も、資料的には少ないものの豊川流域の遺跡に共通する特徴と考えてよいであろう。

麻生田Ⅲ期

S Z 17、22、23、26、30、31、36、38、60、88、100がこれに相当する。深鉢・壺が定形化する時期で、この時期をもってはじめて条痕文系土器文化が確立したと言つていい。

〈組成〉

深鉢A2（27、28、37、38、44、45、47、49、54、88、141、148）、壺G1（58）・J（35、36、46、57）・K（24）がある。

〈特徴〉

- ① 深鉢においてはⅠ期以来のB・C類、A1類が姿を消し、A2類に限られ、定型化する。A2類そのものはⅡc期に出現するが、Ⅲ期になるとより内弯度が強くなる。器面調整は二枚貝腹縁による条痕調整のものが一部（47）をのこして姿を消し、原体は半截竹管もしくは半截竹管系のものとなる。方向は单斜方向→横方向に順次変化する。口端部はすべて面取りされ、中央部が沈線状に凹むもの（44、88他）、斜め内側に向け面取りされるもの（28、37、44、45、83、88、141、148）が多い。Ⅳ期に出現する甕F類への1つのステップと思われる。

- ② 甕類の消滅、Ⅱb期に盛行した擦痕系の甕がⅡc期から減少し、Ⅲ期では消滅する。煮沸形態は

深鉢のみとなるが、46のように大形壺にもにこげ痕がのことから、大形壺の一部も煮沸形態の一つとして利用されていたことがわかる。

③ 壺類の定型化。Ⅱ C 期の壺 H (74) を継ぐものである。口頸部は広口化し、口頸部と肩部に指や棒による押圧を加えた太い断面三角形の突帯が2条めぐる。この突帯は突然出現する感じで祖形がはっきりしないが、今のところ、馬見塚式期に並行する時期と思われる⁽¹¹⁾長原式の二条突帯の壺、所謂伊勢系の大形壺 I の影響を受けてと言うことしかできない。しかし、伊勢系の壺 I は二枚貝による押圧を突帯に施す点で違いを持っている。Ⅲ期～Ⅳ期にかけての時期に比定される袋状土坑の1つである S K 348からは、肩部に貝殻押圧を加えた突帯がめぐる壺が出土し、また検出の際にも多少出土している(252)。おそらくこれらの土器の影響を受けているのだろう。

また、胴部は球形化がさらに進み球体に近い形となる。器面には半截竹管もしくは半截竹管系原体による横方向主体の条痕を施す。尚、突帯は条痕調整を施した後につけられる。大型のものと同じ器形の中型のものもある。

④ 袋状土坑の出土状態から (S K 332、334)、この時期に浮線文系 D 類の鉢形土器が伴うことが推測できる。

⑤ また袋状土坑の出土状態をみると、浮線文系鉢 D 類とともに遠賀川式の壺、甕 (S K 334-174、S K 352-215、S K 348-226、S K 354-230、231、232等) がかなり含まれている。Ⅲ期～Ⅳ期にかけて遠賀川式土器の影響をかなり受けていることがわかる。Ⅳ期に盛行する甕 F は、深鉢 A 2 の系譜としてとらえることができるが、そこに遠賀川式の甕形土器の影響を確実にとらえることができる。

〈時期〉

櫻王貝塚出土の櫻王式に近い組成を持つ。尾張、西三河地方と異なるのは、大型壺の突帯が両地方では口縁に1条めぐるだけのものが多いのに対し、麻生田大橋遺跡出土のものは2条突帯がめぐるという点である。もう1つ、尾張に比べて半截竹管系の原体の使用が多い点でも異なっている。

麻生田Ⅳ期

S Z 12、17、20、25、58、63、67、69、75、がこれに相当する。豊川市の調査ではこの時期の土器棺墓がかなり出土している⁽¹³⁾が、当調査区では意外と少なく、Ⅰ期と同様、検出の土器によるとところが多い。2時期～3時期に区分できると思われるが、ここでは一括して取り扱うこととする。

〈組成〉

甕 F (25、26、30、77、96、97、116)、壺 K (32、86、118)、壺 L (11、40) がある。壺 L はⅢ～Ⅳ期のいずれかに属すると思われるが、S Z 12、25ともに単独出土のため組み合わせ等で時期を決定するに至らなかった。

〈特徴〉

① 深鉢 A 2 から、遠賀川式の甕形土器の影響を受けて甕 F が出現する。Ⅰ期以来引き続き存在した深鉢形土器が消滅し、甕形土器に転化する。口頸部は外反し、丸味の強い胴部がつく。器面は半截竹管による縦羽状条痕調整である。口頸部径と胴部最大径がほぼ等しい F 1 類 (25、30、77) と口

径が胴部最大径より大きいF 2類（26、116）がある。77→30→116→26の流れとしてとらえることが可能である。口頸部内面に刷毛目調整を施すもの（77、26他）が見られ、Ⅳ期前半には確実に刷毛目調整が存在する。

- ② 壺K（118）は壺Jの流れを持つものである。壺Jに比べ広口化が更に進み、口頸部、胴部ともに長くなる。突帯は半截竹管による刻目を施したものが口端直下に1条めぐるのみで肩部突帯はなくなる。器面には半截竹管もしくは半截竹管系を原体とする条痕が文様のようにして施される。確実に文様として土器を飾ることを意識していると思われる。118は壺K類に多くみられる肩部の波文が省略され横方向条痕で代用している。これを時期差としてとらえるのかは、類例が少ないために判断がつかない。
- ③ 11、40は遠賀川系の影響を受けた壺である。40は、器面調整的には壺G 1の流れを継ぐもので、114（Ⅱ b期）→58（Ⅲ期）→40とたどることができる。底部を強くヘラ削りする手法（Ⅲ期の深鉢A 2類-98等にみられる）、下胴部を縦放射状に刻む手法（Ⅳ期の壺J類-118等にみられる）から、Ⅲ期からⅣ期にかけての時期に比定される。おそらくⅣ期の可能性が高いと思われる。
- ④ 検出の際出土した土器の中には、肩部に波文を持つ壺が多く含まれている。口頸部片の中にも縦の沈線を施すもの（330）、突帯を消失したもの（328、329、331）等新しい要素を持つものがある。また、内面に、波文、連弧文、突帯を持つもの（332～337）等、更に新しい要素を持つ壺も出土している。

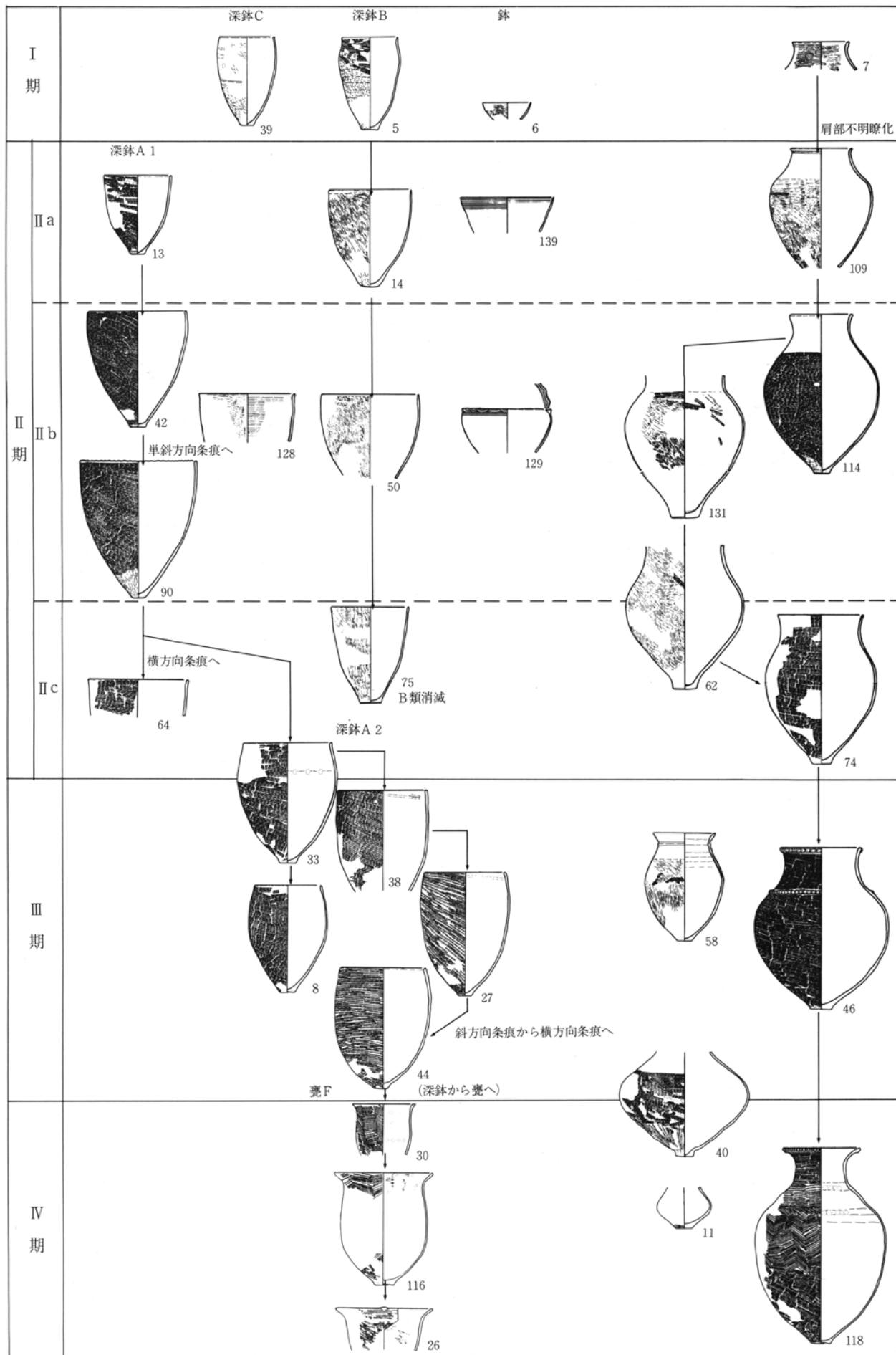
〈時期〉

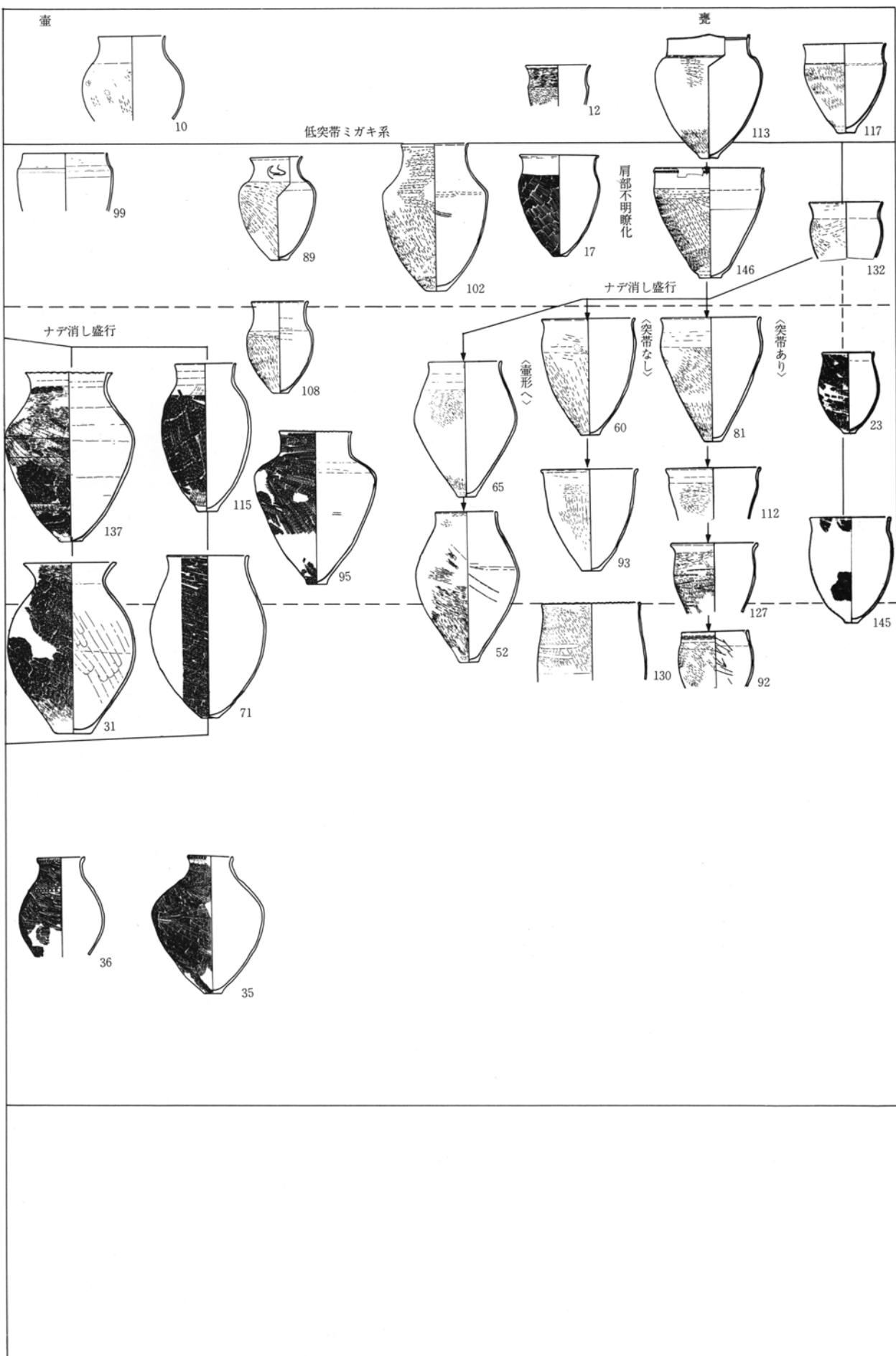
水神平式に相当する。紅村氏が言うように定形化した区分は不可能であるが¹⁴⁾、2時期に細分が可能であると思われる。

また、最後に取り上げた壺332～337や、SK341出土の波文が撥ね上げ文に変化した壺182は、続水神平式（所謂岩滑式）に相当すると思われ1つの画期となりうる可能性を持っている。この時期も、大型壺が受口状をなさないことなど尾張にみられる岩滑式、静岡の丸子式とは異なる点を持っているように思われるが、資料に制約が多いためここでは言及を避けたい。

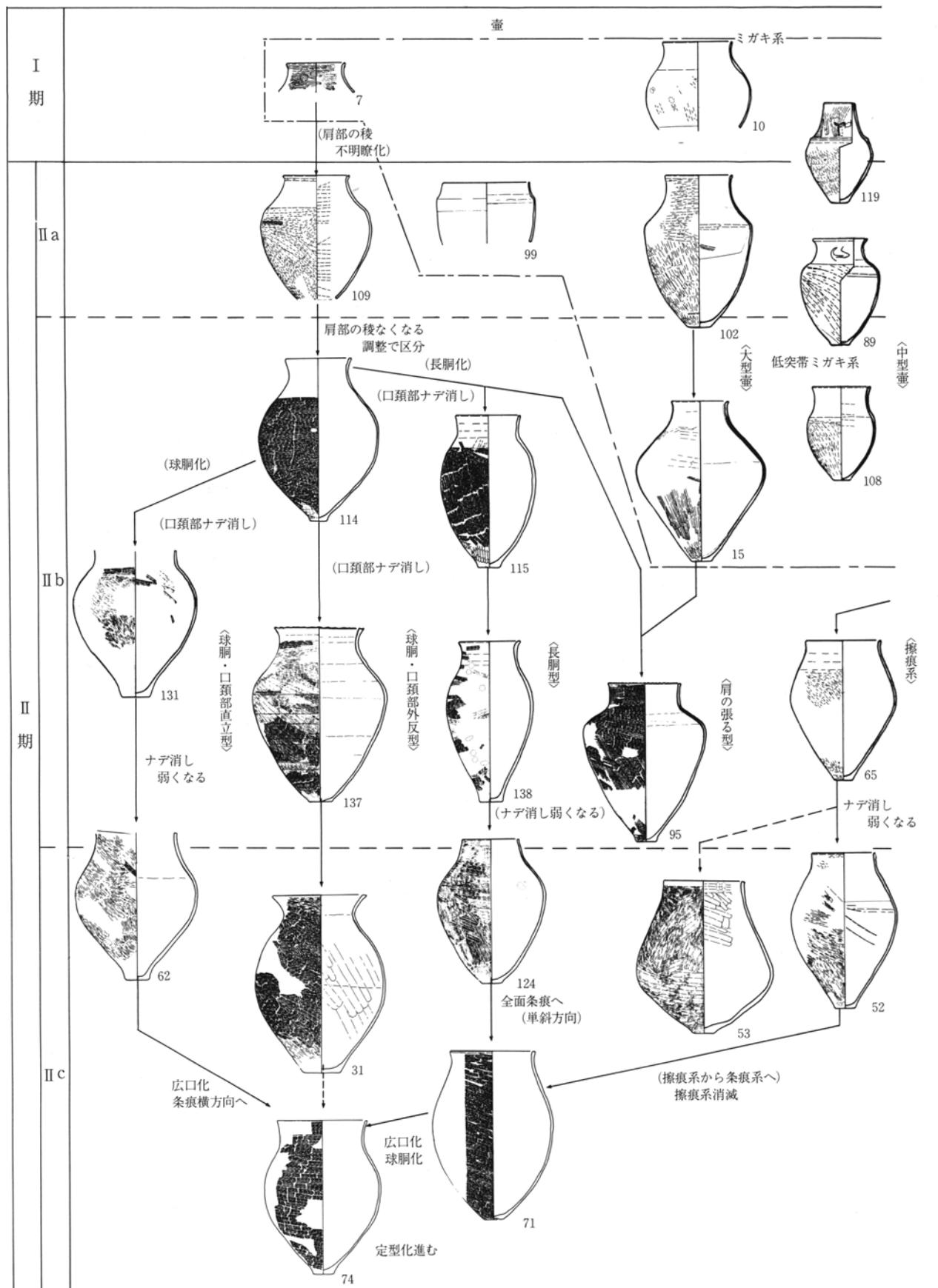
〔註〕

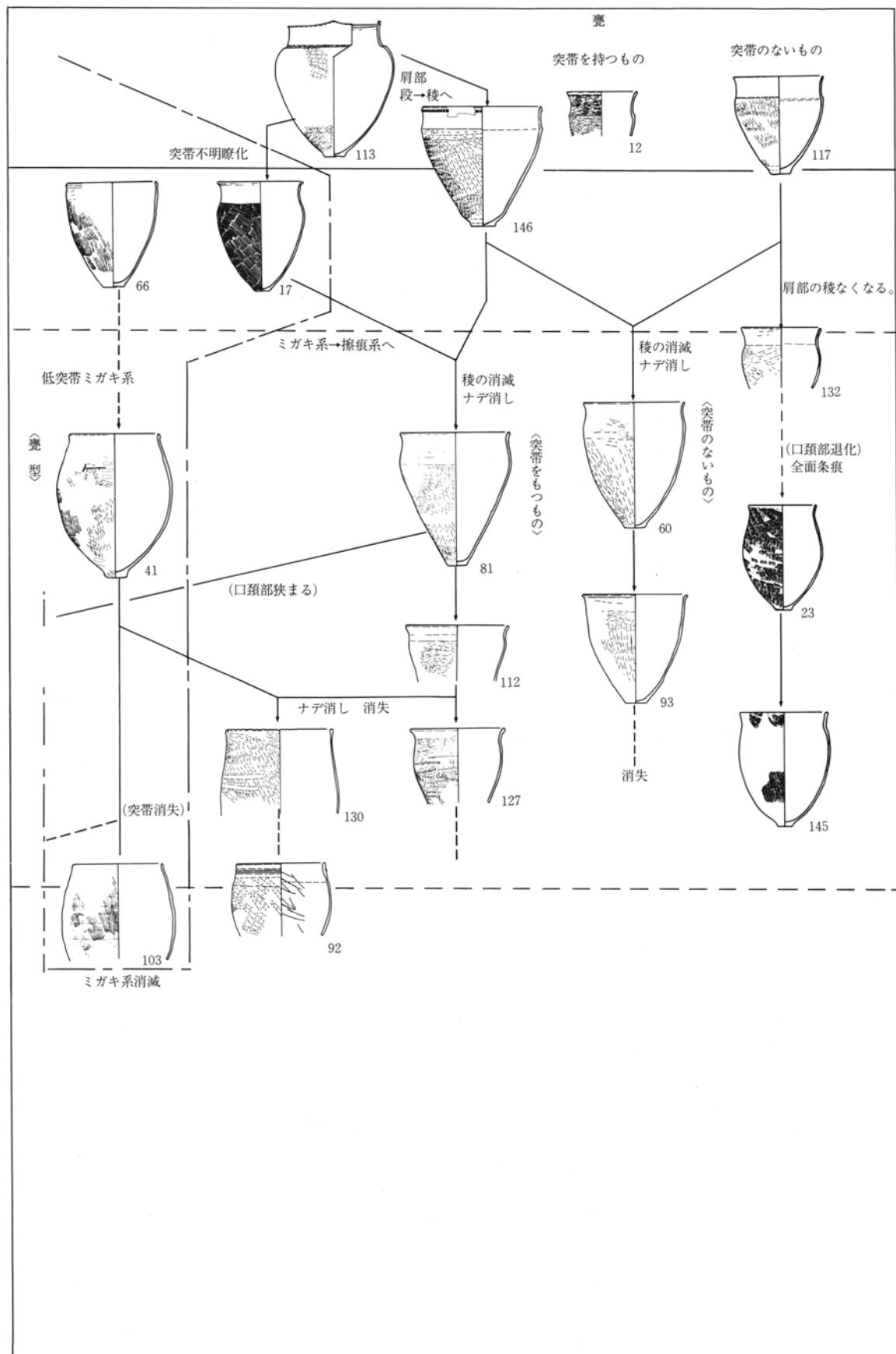
- (1) 杉原莊介・外山和夫「豊川下流域における縄文時代晚期の遺跡」『考古学集刊』第2巻第3号 東京考古学会 1964
- (2) 石川日出志「三河・尾張における弥生文化の成立－水神平式土器の成立過程について」『駿台史学』第52巻 1981
- (3) 増子康真『愛知県を中心とする縄文時代晚期後半土器型式と関連する土器群の研究』 1985
- (4) 設楽博己「中部地方における弥生土器成立過程」『信濃』第34巻第4号 信濃史学会 1982
- (5) (3)に同じ
- (6) (4)に同じ
- (7) 大參義一「縄文式土器から弥生式土器－東海地方西部の場合」『名古屋大学文学部研究論集』56 1972
- (8) 中村五郎『畿内第1様式に併行する東日本の土器』 1982
- (9) (2)に同じ
- (10) (3)に同じ
- (11) 愛知考古学談話会『突帯文土器の終末』 1990
- (12) (3)に同じ
- (13) 前田清彦「突帯文土器から条痕文土器へ」『突帯文土器の終末』愛知考古学談話会 1990
- (14) 紅村弘「水神平式土器の諸問題」『東海先史文化の諸段階』資料編Ⅱ 1979他





第69図 麻生田大橋遺跡出土土器 編年図 (1 : 20)





第70図 麻生田I～II期の壺・甕の変遷図 (1:20)

(4) 土器棺の時期別分布

土器棺の時期別分布を第71図に示した。載せたのは時期の比定が明確なものだけで、不明確なものは除いておいた。以下、図にしたがって各々の時期の分布の状況を述べる。

〈I期〉

89B区北側に3基が集中し、あとは89A区南端と63区北側～南に向けて1列に3基が並んでいる。89B区北側に1つの中心がある。

〈II a期〉

I期に引き続き89B区北側の隣、89A区北端に3期が集中する。残りは89A区、63区の北壁に沿うような形で9基がほぼ帯状に分布する。調査区の北側の壁に分布が集中する傾向を持つ。

〈II b期〉

I・II a期が線状の分布とするなら、II b期の分布は面的な広がりを持つ。東西はI・II期と同じ範囲であるが、内側をすべて埋めるような分布状態を示している。しかし、中央部の分布はやや粗である。

〈II c期〉

II c期の外側に大きく円を描く形で帯状に分布する。さらに今まで土器棺墓が築かれなかった63区西側にも少数であるが分布するようになる。

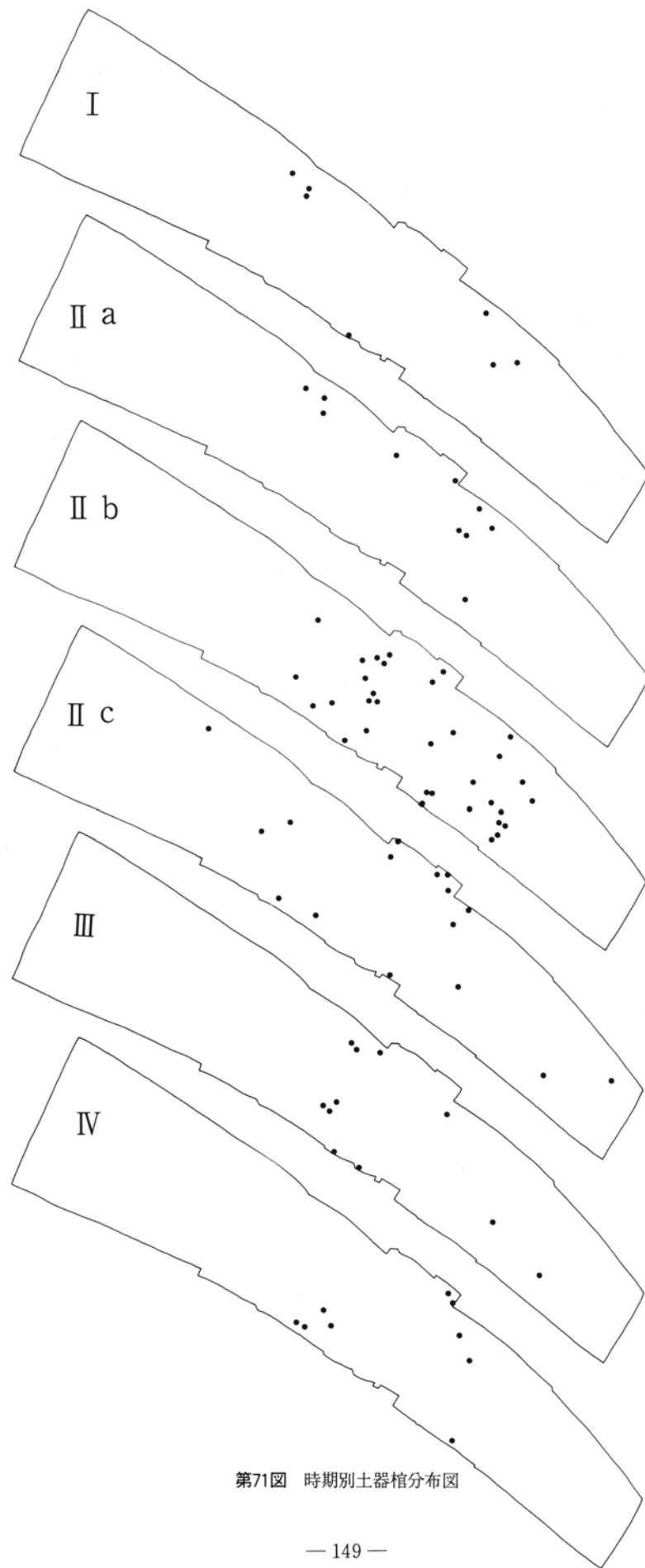
〈III期〉

89A区東側には築かれず、今まで分布が粗であった中央部を中心にして南北に帯状に築かれる。そして一部少量だが63区の西側にも分布する。

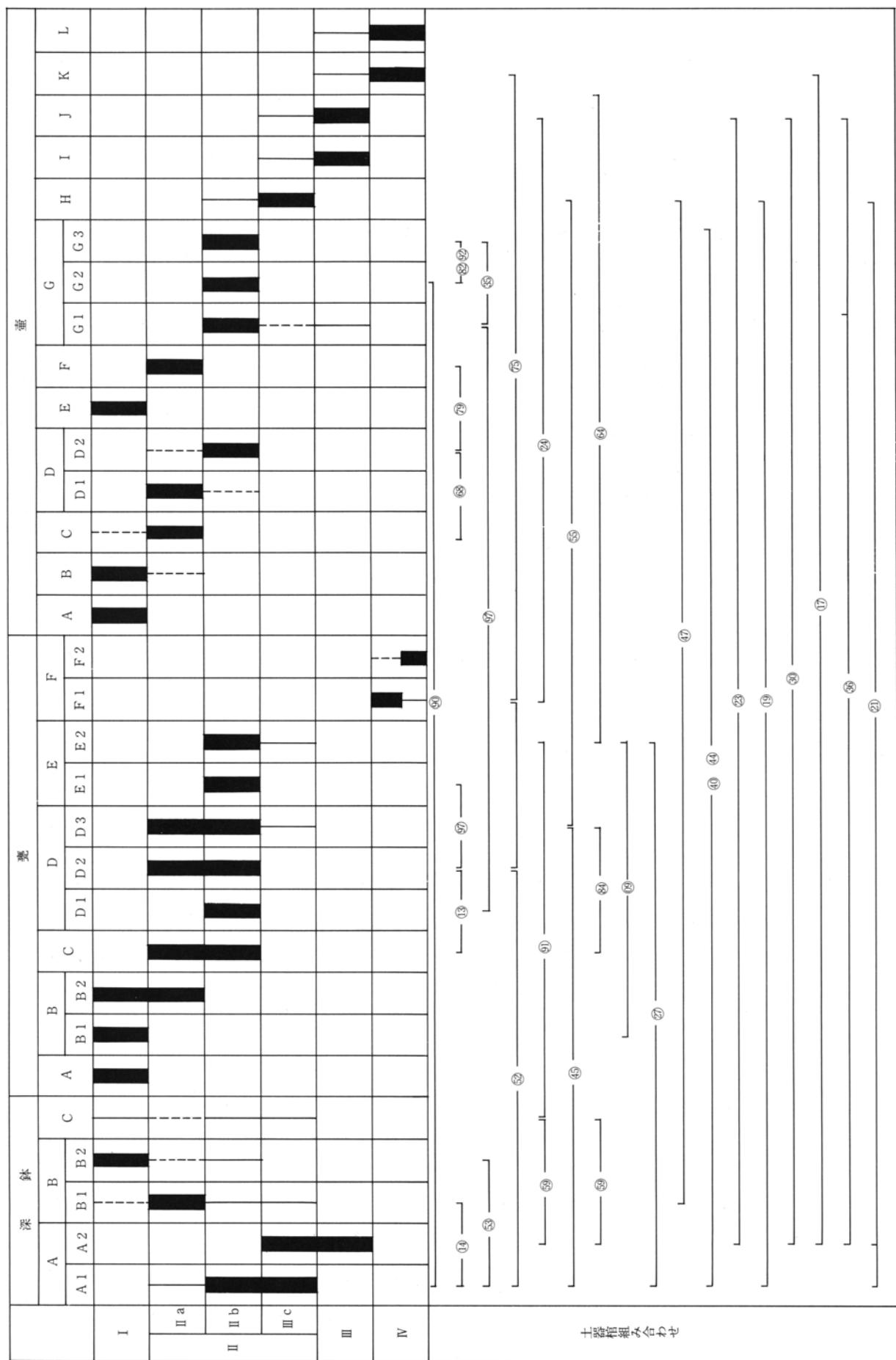
〈IV期〉

89A区南端に4基が集中する。あとはII b・II c期の北西分布境界域の外側に弧を描くように帯状に分布している。

以上のことから、I期には大まかな分布域が限定され、II a・II b期にはその範囲内に多くの土器棺墓が築かれたことがわかる。そしてII c期には分布サークルが少し広がり西側にも分布が伸びて行く。更にIII期になると今まで分布が粗であったサークルの中央部を中心に埋築され、IV期にはさらにそのサークルの外側を中心に築かれるのである。以上は、埋蔵文化財センター調査分だけの結果である。麻生田大橋遺跡全体の結果を加えなければ正確なものとは言えない。市の調査報告が待たれる。



第71図 時期別土器棺分布図



第72図 器種別変遷図